特集　媒介される文学

メディア理論と文学

勝　田　悠　紀

アンドリュー・バーケットは『ロマンティック・メディエーションズ：メディア理論と英国ロマン主義』の序論で、「メディウム（medium）」という語が今日のように「コミュニケーションの技術的手段」を指すようになったのはヴィクトリア朝後期に過ぎないことを指摘し、いわば「メディア以前」のロマン主義の文学を「メディア」の視点から考えることの時代的な不整合に注意を促しながら、それだからこそありえたロマン主義作家の「多様で柔軟なメディア」の概念の表現を探っている（Andrew Burkett, *Romantic Mediations*, State U of New York P, 2016, p.3）。このようなある種のアナクロニズムの感覚はしかし、ロマン主義に限らず、過去の文学をいわゆる「メディア論」の観点から語ろうとするとき、―― 過去の何事も「現在」から自由に語ることはできない、という一般則に留まらない切迫感を伴って ―― 広く生じがちな違和感であるように思われる。現在ますます注目を集めつつある「メディア」の理論的・歴史的な研究は、もちろんヒトは常にメディア的存在であったと考えることはできるにせよ、やはりアナログ革命とデジタル革命を経て見るからに急激な変化を遂げてきた、そして今も日々遂げている、新しいメディアへの関心に動機付けられてきた部分が大きいからだ。メディア論の祖マーシャル・マクルーハンは、目の前で光り音を発するテレビに興奮しながら活字以前の口承文化を称揚して、人々を当惑させつつも魅了したのだった。わたしたちは過去の文学作品とデジタル時代のメディア論というこの奇妙な組み合わせから、何を見つけることができるだろうか。

この問題は、また、対象作品が遠い過去に執筆されたことのみに関わる、つまり近年に書かれた小説や詩を論じれば解消するようなものではなく、むしろ現代の多様化したメディア環境における「文学」の位置への問い、インター

ネットに繋がれながら同時に小説や詩を読むとはどのようなことかという問いへの、入り口ともなっているだろう。現代において、文学は明らかに「古いメディア」であり、本はそのほかの様々な「新しい」メディアに囲まれて存在しているからだ。このアナクロニスティックな「奇妙な組み合わせ」をまさに目の前にして思考することは、わたしたちに何を可能にしてくれるだろうか。

本特集に収められた四つの論考は、各論者の関心の対象を論じながら、文学とメディアの関係にそれぞれの表現を与えている。以下各論考の概要を簡単に紹介しよう。

梅田拓也の「文学研究とメディア論——マクルーハンとキットラー」は、本特集のいわば理論篇である。梅田はメディア理論を代表する二人の論者、マーシャル・マクルーハンとフリードリヒ・キットラーを、彼らの文学研究との関係において比較する。この論考は、メディア論者としてのマクルーハンとキットラーの文学研究に対する態度の差異——彼らのメディア論が文学への期待の延長線上に現れたか、その抵抗として現れたか——を対比的に描き出すと同時に、現在「メディア論」と呼ばれるに至ったものが実際には「文学理論の変奏」として出現したというヴィジョンをも示し、今後のメディア研究が取るべき一つの道筋を提示する。

勝田悠紀の「ポータブル・キャラクターズ——ディケンズの複製技術」は、「キャラクター」の持つ「メディア横断」能力に注目し、それが近代小説のなかで最初に顕在化した事例の一つとして19世紀作家チャールズ・ディケンズの登場人物を取り上げる。手がかりとして小説キャラクター論の重要書アレックス・ウォロックの『一対多』の更新を図りつつ、作家とキャラクターの関係をめぐる伝記的要素、および、『荒涼館』と『リトル・ドリット』の何人かのキャラクターと新しい複製技術との親和性を検討することで、「ディケンズ的キャラクター」のメディア横断性の様態を明らかにすると同時に、それがどのようにして可能になったかという問いに一つの解答を試みる。

今関裕太の「回転するテクストとオプティカル・サウンド——『第三の警官』の媒体技法」は、アイルランドの後期モダニズム作家フラン・オブライエンの『第三の警官』の不可解な構造、いわゆる語り手が「書いている」こととは明らかに矛盾する「回転する」テクスト構造に注目し、作中に登場する奇想的機械の正体を明らかにしながら、この「語り」が映像と音声の同期を可能にするサウンド・オン・フィルム方式の録音・映像の表象となっている可能性を提案する。この考察は『第三の警官』に一つの新しい解釈を与えるに留まらず、

キットラーの「幽霊」論の拡張、さらには小説的リアリズム表現を獲得しつつあった 1930 年代の映画から小説への、いわば逆向きのメディア複合のあり方にまで広がっていく。

塚越幸祐の「媒介のかたち――『ボーダー・カントリー』、つなげる技術としてのリアリズム」は、レイモンド・ウィリアムズ後期のメディア論、特にそこで提示される「リアリズム」の概念と、彼の初期小説『ボーダー・カントリー』とを突き合わせ、ウィリアムズのメディア論者としてのあり方に光を当てると同時に、のちに彼がメディア論のなかで理論化することになる「媒介」、「リアリズム」概念の原初的な形態が、『ボーダー・カントリー』の「帰郷」の主題に見て取れることを論じる。冒頭の梅田の論文がマクルーハンやキットラーにおける文学研究からメディア理論への移行をたどるものだったとすれば、この塚越の論文は、ウィリアムズのメディア論から彼の小説作品へと遡行し、その原体験のなかにあった「メディア」の孕む「つながりの技術」を照らし出すものになっている。

最後に、この特集企画の経緯について簡単に説明する。2018 年初頭から夏にかけて、メディア論とロマン主義をテーマにした読書会を英文科院生を中心にして行い、学科内外からの参加者を得て議論を深めることができた。特にメディア論と文学の関係については、『リーディング』を媒体とし、会への参加を通じて各々が発展させた議論を、特集として形にしようという話が持ち上がった。この特集の執筆者はみな、その読書会の参加者である。なお、論文の改稿作業においては、会のメンバーの一人だった『リーディング』同人の騎馬秀太が協力してくれた。

『リーディング』の総目次を見る限り、このような特集企画は初めてであるようだ。執筆者のうち、梅田、塚越は英文学科外からの寄稿である。ウェブ公開もされかつてより広い読者に届く可能性のある紀要が、「業績作り」のための媒体などではなく、その身軽さを生かして、普段出会わない人たちの共同作業の場、また、新しいアイディアの実験の場となればよいと思う。本特集がささやかながらその一つの例となっていれば幸いである。